

青森県内における縄文時代前期末～中期初頭の異系統土器群について - 県内出土資料の集成 -

茅野嘉雄

はじめに

縄文時代前期から中期における青森県内は、前期中葉に確立した円筒土器様式圏の中心的な地域にある。現在円筒土器様式については前期を下層式、中期を上層式に当てており、下層式は大きく4段階、上層式は大きく5段階の変遷が考えられている。各時期ともに他の土器様式との接触を持つが、特に前期末葉～中期初頭段階と中期中葉～末葉段階には隣接する大木式土器様式を中心とした他地域との接触が顕著である。南郷村畠内遺跡では多量の円筒下層式土器に混じって他地域の土器群がまとまって出土している。筆者はその報告において、円筒土器様式の範疇で捉えられるものを在地系土器群、他地域の土器もしくはその影響下に製作されたものを異系統土器群とし、両土器群についての検討を加えた（『畠内遺跡』県埋文報276集）。その際、県内の他遺跡から出土した資料については、言及することはできなかったが、その後調査を進めていくなかで発掘された資料中にも異系統土器群と捉えうるものが多数存在することを知った。ここでは縄文時代前期末～中期初頭の青森県内における異系統土器群について、その出土例を紹介し、今後の研究の基礎としたい。なお、出土土器の記述に際しては、以下の器形分類を採用しているため、各遺跡の報告とは若干異なる解釈もある。

[器形分類](図 7)

深鉢 A 類・・・円筒形の器形を持つもの。

深鉢 B 類・・・円筒形の胴部を持ち、口縁部で外傾するもの。

1 種・・・胴部がほぼ直立するもの。

2 種・・・胴部がやや膨らむもの。

深鉢 C 類・・・円筒形の胴部を持ち、口縁部が内湾しながら外傾するもの。

深鉢 D 類・・・胴部がやや下膨れ気味に張り出し、口縁部が外反するもの。

深鉢 E 類・・・円筒形の胴部を持ち、頸部が外反し口縁付近で直立または内傾するもの。

深鉢 F 類・・・金魚鉢形の胴部上半に円筒形の底部が付くもの。3種に分類される。

1・・・全体形における金魚鉢の比率が高いもの。

2・・・全体形における円筒形部分の比率が高いもの。

3・・・1から円筒形の底部を除いたもの

深鉢 G 類・・・円筒土器の器形が F 類の影響を受け変容したもの。

浅鉢 A 類・・・底部から口縁部まで緩やかに内湾しながら立ち上がるものの。

広口壺

1 各遺跡出土資料の概観

図 1～6 には県内各遺跡から出土した異系統土器と、同じ遺構内のほぼ同時期と思われる在地系の土器の一部を示した。遺構外出土のものに関しては、筆者の主觀により掲載土器を選択している。異系統土器を出土した遺跡は、管見に触れたもので、南郷村畠内遺跡、八戸市笹ノ沢（3）遺跡、牛ヶ

沢(4)遺跡、蟹沢遺跡、蟹沢(2)遺跡、福地村館野遺跡、川内町熊ヶ平遺跡、東通村石持納屋遺跡、青森市横内(2)遺跡、小牧野遺跡、三内丸山遺跡、稻山遺跡、桜峯(1)遺跡、鰺ヶ沢町鳴沢遺跡、平賀町太師森遺跡、黒石市板留(2)遺跡、碇ヶ関村四戸橋遺跡、大鰐町大平遺跡、鰺ヶ沢町餅ノ沢遺跡、深浦町津山遺跡、三厩村中の平遺跡、森田村石神遺跡の計22遺跡である。以下に各遺跡出土資料を紹介する。

畠内遺跡(南郷村)

第108号竪穴住居跡・・・炉体土器によって円筒上層a式の古段階の遺構と考えられる。異系統土器は覆土中から大木6式と思われる深鉢F類が出土している。口縁部は半裁竹管状工具を使用した文様、胴部は結節を縦回転している。

第92号竪穴住居跡・・・炉体土器によって円筒下層d2式~上層a式の大型住居跡である。覆土中から深鉢G類が出土している(報告書では遺構外と報告している)。器形は球胴部分を器体中央よりやや上に持ち、底部は緩やかに張り出している。口縁部は縄文原体の側面を梯子状に押圧しており、胴部は結束第2種を縦回転している。

第95号竪穴住居跡・・・炉体土器から円筒下層d2式~上層a式の大型住居跡である。覆土中から深鉢F類と深鉢A類と考えられる異系統土器が出土した。双方ともに口縁部文様は半裁竹管の背を利用した太めの沈線であるが、6には三角形の印刻も見られる。

第107号竪穴住居跡・・・出土土器から円筒下層d2式~上層a式の遺構と考えられる。覆土中より受け口状の口縁を持つ深鉢E類が出土している。

第53・71号土坑・・・深鉢F3類が出土している。両遺構より出土したものがB捨場出土のものと接合している。文様はすべて半裁竹管の腹を使用した沈線であり、それに三角形の印刻が附加されている。胴部下半では三角や「U」字状に区画した沈線内に横位の沈線を充填している。関東地方の五領ケ台式に見られる手法である。

第42号土坑・・・在地色の濃い深鉢G類が円筒下層d1式に伴って出土している。

第325号土坑・・・深鉢B1類が円筒下層d1式と一緒に出土している。1の口縁部は半裁竹管の背部分を使用した沈線である。

第328号土坑・・・円筒下層d1~d2式と橋状把手を持つ深鉢F類?が出土している。

第340号土坑・・・円筒下層d1式と大木6式の深鉢A類が出土している。6の文様はすべて半裁竹管の腹部分による沈線である。口縁部には指頭押圧による円形の凹文があり、頸部区画には三角形の印刻が見られる。

A捨場出土土器・・・A捨場は遺跡北側の台地東側の平坦部に存在し、埋設土器群を伴う円筒下層d1~d2式の遺物捨場と考えられる。深鉢A類(5)・B類(17)・深鉢F類(7~16・18)・深鉢・G類(4・6)が出土している。深鉢F類は口縁部の文様施文技法から大きく沈線文主体のもの(5・7・11・15・16)と細粘土紐貼付のもの(8・9・14・18)の2種に分類される。時期的には5が大木7a式並行と見られる他は大木6式の範疇で捉えられるものである。

B捨場出土土器・・・B捨場は遺跡北側台地の北斜面に展開する。円筒下層a式~上層a式までの捨場である。3~7は異系統土器である。深鉢A類(6)・B類(3)・C類(7)・F類(5)が出土している。3は時期のはっきりしないものであるが、大平遺跡出土例等から考えて、山形県吹浦遺跡

第 群土器の仲間と捉えている。7の口縁部文様は断面の丸い棒状工具を使用し、梯子状に文様を展開している。3～6は大木6式並行、7は大木7a式並行であると考えられる。

C捨場出土土器・・・C捨場は遺跡北側台地南西斜面に展開する、円筒下層c式～上層a式にかけての捨場である。深鉢A類(3・5)・B類(4・6・7・8・10・24・25・28)・D類(2)・E類(11・14・30)・F類(9・12・13・15～19)・浅鉢(26・27・29)が出土している。在地系土器群は円筒下層c・d式主体であるが、最も出土量が多いのは下層d1式である。下層d2式・上層a式は少量である。異系統土器は大木6式～7式相当のものと朝日下層～新保式相当のものが出土している。3～9・13・15～19・24～29は大木6～7a式に、10～12・14は朝日下層式に、30は新保式に相当すると考えられる。30は半隆起線文による文様が横位に展開され、胴部には結節が縦位に回転されている。頸部の区画は半隆起線文による3本の沈線と円形竹管状工具による斜め下からの刺突による。

笹ノ沢(3)遺跡(八戸市)

第6号竪穴住居跡・・・炉体土器によって上層a式の遺構と考えられる。3は深鉢G類に分類される。やや膨らみを帯びた胴部をもち、底部付近がやや張り出している。口縁部区画帯から胴部上半部にかけては隆帯による三角形区画の内側を縄の側面圧痕により充填している。表現方法は異なるが、畠内遺跡53・71号土坑出土土器の文様構成に類似する。大木7a式もしくは五領ヶ台式の影響と考えられる。

第18号土坑・・・2はやや口縁部のすぼまる深鉢Aに分類されるか。口縁部はすべて縄の側面圧痕により文様が構成されているが、一番下位にはY字状の垂下文様が連続して施文されている。第6号住居跡と同様大木7a式の影響下に製作されたものと思われる。

第134号土坑・・・覆土中より深鉢B類が出土している。1は口縁部区画隆帯からさらに下位に逆V字状に隆帯が垂下している。大木7a式の影響と考えられる。

第1号捨場・・・半裁竹管の腹を使用した沈線を連弧状に施文している。第18号土坑の2と類似する文様構成であると思われる。

牛ヶ沢(4)遺跡(八戸市)

第57号住居跡から浅鉢?形土器が出土している。口縁直下の連弧状隆線に沿って縄の側面圧痕が施される。大木7式に相当すると思われる。

蟹沢遺跡(八戸市)

No3トレーナーから円筒下層d1式土器と大木6式の浅鉢形土器が出土している。文様は細粘土紐の貼付と、俵状の貼付である。

蟹沢(2)遺跡(八戸市)

大木6式の影響を受けた深鉢B2類の土器埋設遺構、遺構外からは円筒下層d1式土器・大木6～7a式土器が出土している。大木式は深鉢F類を主体とし、深鉢A類・D類等も存在している。ここでも文様には半裁竹管の背・腹を使用した沈線を施文するものと細粘土紐を貼り付けるものの2種がある。また、沈線文を主体とするものには、3や17～26の様に三角形の印刻を伴うものがある。

館野遺跡(福地村)

第23号土坑・・・覆土中から円筒上層a式土器の破片と異系統土器が出土している。1は深鉢B類であり、隆帯断面形状等から製作技法は円筒上層a式の範疇で捉えられるが、半裁竹管状工具による

刺突文・蛇行しながら垂下する隆帯など大木7a式の影響を思わせる個体である。

第51号土坑・・・覆土中から円筒上層a式（深鉢B類）と一緒に異系統土器が出土している。3は深鉢A類である。口縁部から蛇行しながら垂下する隆帯が貼り付けられており、第23号土坑出土の1と同様大木7a式の影響下に製作されたものと考えられる。

熊ヶ平遺跡（川内町）

第11号竪穴住居跡・・・円筒下層d式土器に混じて深鉢G類が出土している。器形こそ大木6式の影響下にあるが、文様構成・製作技術等は円筒下層d式の範疇である。

石持納屋遺跡（東通村）

遺構内からの異系統土器の出土はないが、出土土器は概ね円筒下層d1～d2式に相当する。遺構外から大木6式の影響を受けた深鉢A類が出土している。口縁部は渦巻き文を中心とし、円圏文と鋸歯状文によって文様が構成されている。工具は半裁竹管状工具の背である。胴部には結束第2種羽状縄文が縦方向に施文されている。

横内（2）遺跡（青森市）

第8号土坑・・・円筒下層d2式土器と大木式土器の影響を受けた深鉢F類が出土している。

小牧野遺跡（青森市）

遺構外から真脇式（十三菩提式）と考えられる土器片が出土している。地文縄文上に結節浮線文が施文されている。

三内丸山遺跡（青森市）

第6鉄塔地区第 層からは円筒下層a式土器と異系統土器が出土している。2～4・6～11がそれにあたるが、半裁竹管状工具の腹部を使用した沈線と刺突を主文様としており、一部に隆帯も見られる。おそらく大木6～7式の影響を受けたと思われる。同様の土器は福地村館野遺跡第23号土坑に見られる。

その他・・・出土地は未発表であるが、朝日下層式に類似する破片が出土している。結節浮線文と鋸歯状印刻文がみられ、器形は深鉢E類と考えられる。

稻山遺跡（青森市）

遺構外から出土した土器の主体は円筒下層d1～d2式土器であり、それらと一緒に異系統土器（4～9）が出土している。4・5は半裁竹管の腹による沈線文により文様が展開している。畠内遺跡C捨場出土土器8に類例が見られる。その他は細粘土紐貼付・結節浮線文を主文様としている。7～9は深鉢A類？と見られる。写真を見る限りでは、胎土に纖維が混入していると思われる。文様構成は朝日下層式的であるが、器形・胎土は円筒下層式の影響を受けていると思われる。

桜峯（1）遺跡（青森市）

C区第6号竪穴住居跡・・・円筒下層d2式土器と、器形に大木6式の影響を受けた異系統土器（深鉢F類）が出土している（3）。

C区遺物集中地点・・・出土土器の主体は円筒下層d2式土器である。異系統土器は朝日下層式に類似する土器（9～11）、深鉢F2類（12）が出土している。9～11は結節浮線文・細粘土紐貼付・半隆起線文など北陸地方の影響が見られる。12は畠内遺跡C捨場出土土器14と同様のものと考えられる。

鳴沢遺跡（鰐ヶ沢町）

遺構外から円筒下層d1～d2式土器とともに深鉢F1類とG類が出土している。双方ともに器形は大木6式の影響を受けるが、文様は円筒下層d式のものである。

太師森遺跡（平賀町）

遺構外出土の土器は円筒下層d2式～上層a式土器を主体とする。異系統土器は深鉢E類が出土している。口縁部には円形のボタン状貼り付けを中心に半裁竹管による沈線が縦位に連続して施文されている。口縁部の屈曲部から下位には地文の横位結束第1種羽状縄文の上に半裁竹管の腹を使用した沈線が、2本1単位で間隔をあけて縦位に施される。沈線の下位には区画として横位に3本の沈線が施される。五領ヶ台式の影響を受けた土器と考えられる。

板留（2）遺跡（黒石市）

A区遺構外・・・円筒下層d式土器と深鉢C類・深鉢E類？が出土している。4は深鉢C類である。口唇部には1箇所に装飾突起を持ち、口縁部には細粘土紐貼付による梯子状の文様が施文されている。胴部は両端巻止めのR Lを縦位に帯状施文している。大木6式に比定される。

C区遺構外・・・円筒下層d式土器と深鉢F類？（2）が出土している。2は深鉢F類？である。口縁部は波状を呈し、波頂部には断面半円状の突起が施される。文様は細粘土紐貼付によるものであり、梯子状の文様を構成している。胴部は結束第1種羽状縄文が縦位に施文されている。

四戸橋遺跡（碇ヶ関村）

遺構外から出土した土器は円筒下層d1～d2式土器を主体としている。その中に朝日下層式（3～5）・大木7a式（6）に類似する土器が出土している。3～5は深鉢E類であり、半裁竹管による集合沈線が施文されている。6の器形ははっきりしないが、状に貼り付けられた隆帶上に棒状工具による刻みが施されている。畠内遺跡B捨場出土土器7に類例が求められ、大木7a式の影響と考えられる。

大平遺跡（大鰐町）

遺構外から円筒下層d1～d2式土器、大木6～7a式土器が出土している。4は深鉢F3類である。鋸歯状印刻文・縄文地に結節浮線文を施文するなど、大木式・十三菩提式の影響が見られる。5は深鉢B2類である。一見して円筒下層b式等に見えるが、報告にもあるとおり、吹浦遺跡第群土器に類似するものである。県内では畠内遺跡B捨場から類似した資料が1点出土している。6・7は半裁竹管による沈線文を口縁部に施文しているものである。6は集合沈線と交互刺突文が見られ、波状突起に合わせて口縁部文様帯を縦位に区画していることから円筒上層式と大木7式の折衷土器と考えられる。7は円筒下層d1式の文様構成を沈線を用いて表現したものである。

餅ノ沢遺跡（鰺ヶ沢町）

第2号捨場・・・円筒下層d1～d2式を主体とし上層a式まで出土している。異系統土器は深鉢C・G類が出土している。3は深鉢F1類である。文様施文に関しては円筒下層d2式土器と同様である。4は深鉢C類である。口縁部には沈線による交叉状の文様が施文されている。大木7a式の影響と見られる。5は深鉢G類である。器形と口縁部の装飾突起に大木式の影響が見られる。胴部は多軸絡条体と結束第2種の縦位回転である。

津山遺跡（深浦町）

第39号土坑・・・円筒上層a式土器と大木7式土器が出土している。2は浅鉢である。4単位の波

状口縁を持ち、波頂部には二股の突起を持つ。波頂部直下には俵状の貼付を持ち、そこからハの字状に半裁竹管による沈線が施文されている。口縁直下には縄の側面圧痕が施される。3は広口壺である。全体に無文であり、頸部には2本の隆帯と4単位の橋状把手を持つ。底部には4箇所に脚が付く。2・3は器形等から大木7a式に相当する。

中の平遺跡（三厩村）

遺構外から深鉢F類が出土している。口縁部は隆帯により横位に区画され、さらに4単位？に縦位区画もされている。胴部には木目状撲糸文が縦位に施文されている。

石神遺跡（森田村）

遺構外から深鉢A・F・G類が出土している。1～3は大木式の影響を器形に受けた円筒下層d2式に相当すると思われる。4は円筒上層a式に相当する。口縁部区画隆帯からさらに下位に隆帯が垂下している。5は深鉢F1類である。口縁部には半裁竹管による沈線が施文され、橋状把手も見られる。胴部には木目状撲糸文が縦位に施文されている。6は実測図では詳細不明であるが、口縁部に半裁竹管による沈線文が鋸歯状に施文されていると思われる。胴部はL Rの縦回転か。県内では畠内遺跡A捨場出土の5に類例がある。

まとめと若干の問題提起

以上に見てきたように、県内では大木6～7a式に相当する、またはその影響を受けた土器と朝日下層式・新保式土器に相当する土器、またはその影響を受けた土器が出土していることがわかった。最も多く見られるのは大木6式に相当する深鉢F類であり、円筒下層式との折衷土器も多数見られる。器形の面では、深鉢A・B類が円筒土器系統、深鉢C・D・F類・浅鉢A類が大木式系統、深鉢E類が北陸系統というように大きく分類できそうである。しかし、各器形においては深鉢C・F類にみられるように文様の施文技法を他の土器様式のものに置き換えているもの等もあり、一概には言えない。また、時期による器形のセット関係も重要ななるが、今後大木6～7式にかけての変遷を再度検討した上で論じてみたい。分布の面では南部・下北地域には大木式系の異系統土器群が多く、津軽地域には朝日下層式系を中心とする北陸系の異系統土器群が多い。特に結節浮線文が施文される土器は今のところ南部・下北地方には見られない。しかし北陸地方の影響が南部・下北地域に皆無であるかといわれればそうではなく、畠内遺跡53・71号土坑出土土器やC捨場出土土器10・11・30等のように器形・文様のどれかに北陸地方の影響が見られるものも存在する。

このように、縄文時代前期～中期初頭の青森県下には他地域の影響を受けた遺物が少なからず存在することがわかったが、今後問題になるのは以下の点である。

1. 円筒土器様式と他地域の土器様式との時間的な並行関係の問題

まずは円筒土器様式の編年の確立が急務である。現行の編年は山内清男の示したものを基に、江坂輝彌・村越潔・鈴木克彦・三宅徹也らが主に津軽地方の資料を使ってそれぞれに作ったものである。各編年に若干の相違が見られるのは研究史に明らかなところである。しかし近年、青森県南部や秋田・岩手両県の北部地方の資料が増加するにつれて従来の編年枠では捉えきれない資料が増えてきている。すなわち報告書で円筒下層d1式という同じ名前が付いている土器であっても、南郷村で出土したものと青森市で出土したものでは明らかに様相が異なるのである。これは、同じ土器様式圏内での地域差で捉えられるのか、土器型式の誤認であるのか、今後の研究で明らかにしなければならない。同じ

ことは大木式土器様式にも言えることである。特に各土器様式同士が接する地域については双方の形質を持ち合わせたいわゆる折衷土器が多数存在している可能性がある。今後はそのような土器群を俎上に挙げ、まず時間的な並行関係を探り、次には土器様式間の影響の及ぼし方を探ることで具体的な交流のあり方や地域間の関係等にも迫っていく必要がある。

2. 各土器様式における製作技法の追究

上記の問題を検討するためには、まず土器そのものについてさらに研究を重ねる必要がある。そのためには、遺跡から出土した土器の型式を明らかにするのではなく、遺跡ごとの土器の製作技術を明らかにすることが重要である。特に円筒下層式土器では下層c式～上層b式までの変遷過程がはつきりしない部分が多い。従来の編年がメルクマールとなる文様の種類に頼ってきたためと考えられる。したがって今後は以下のような項目で土器を観察し、報告書に反映していくべきと考える。

土器胎土に含まれる混入物の状態。(纖維が入るのか・砂粒が多少・特徴的な鉱物の有無など)

素材粘土の成形技術(素材粘土の積み上げ・整形方法)

内面調整の工具の種類と動かし方。

口唇部の断面形状

土器表面に施文される文様の原体とその動かし方

・縄文原体であれば山内清男の分類にしたがって記述。

・器表面に現れている縄文の条と節の寸法。

・刻み・刺突などに使用される工具の先端形状・断面形状・太さとその動かし方。

・貼り付け粘土紐の太さや断面形状。

文様区画帯等に使用される隆線(帯)の断面形状や貼り付け方。

土器の器形

口縁部の形状(波状か平縁かなど)

以上の項目で各属性を調査した後、その組み合わせがどのようなものなのかを算出することで、その遺跡の土器群がどのような特徴を持っているのかある程度把握することが可能と考えられる。また、他の遺跡についても同様な手法を繰り返すことで、共通点や相違点を客観的に指摘することができるようと考えられる。あとは遺構内一括出土遺物などを援用し、同時期性等を検証することで、各遺跡の土器群の編年的な位置づけが定まっていくと考えられる。

ただし、ここで重要なのは各遺跡ごとに調査を担当する人間が同様な視点で遺物を見れるかどうかである。それを可能にするには用語の問題、形状認識等、クリアしなければならない問題が多数ある。それらについては次回に譲ることにしたい。

以上、先学からはそんなの基本中の基本だとお叱りを受けるようなことを書いてしまったが、その基本が報告書に反映されていないことがままあるのが現状であると思う。今後の反省材料とし、研究を重ねていきたい。

『引用・参考文献』

青森県教育委員会	1975	中の平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
青森県教育委員会	1980	板留(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第59集
青森県教育委員会	1980	大平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第52集
青森県教育委員会	1992	鳴沢遺跡・鶴喰遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第142集
青森県教育委員会	1994	畠内遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第161集
青森県教育委員会	1995	畠内遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第178集
青森県教育委員会	1995	熊ヶ平遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第180集
青森県教育委員会	1996	畠内遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第187集
青森県教育委員会	1996	三内丸山遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第205集
青森県教育委員会	1997	畠内遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第211集
青森県教育委員会	1997	津山遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第221集
青森県教育委員会	1997	三内丸山遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第230集
青森県教育委員会	1999	畠内遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第262集
青森県教育委員会	2000	畠内遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第276集
青森県教育委員会	2000	餅ノ沢遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第278集
青森県教育委員会	2001	蟹沢(2)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第292集
青森県教育委員会	2001	畠内遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第308集
青森県教育委員会	2001	笹ノ沢(2)・(3)遺跡	青森県埋蔵文化財調査報告書第305集
青森市教育委員会	1995	横内遺跡・横内(2)遺跡	青森市埋蔵文化財調査報告書第24集
青森市教育委員会	1998	桜峯(1)遺跡	青森市埋蔵文化財調査報告書第36集
青森市教育委員会	1998	小牧野遺跡	青森市埋蔵文化財調査報告書第40集
青森市教育委員会	2001	稻山遺跡	青森市埋蔵文化財調査報告書第56集
碇ヶ関村教育委員会	1998	四戸橋遺跡	碇ヶ関村文化財調査報告書第2集
能都町教委区委員会	1986	真脇遺跡	
八戸市教育委員会	1999	八戸市内遺跡発掘調査報告書11(蟹沢遺跡)	八戸市埋蔵文化財調査報告書第77集
八戸市教育委員会	2001	牛ヶ沢(4)遺跡	八戸市埋蔵文化財調査報告書第89集
平賀町教育委員会	1983	太師森遺跡	平賀町文化財調査報告書第14集
東通村教育委員会	1985	石持納屋遺跡発掘調査報告書	
石岡憲男	1999	円筒下層式	縄文時代10号
江坂輝彌編	1970	石神遺跡	
角張淳一	1999	石器研究の感想	東京考古 16
金子直行	1999	縄文前期末土器群の関係性 - 十三菩提式土器と集合沈線文土器群の関係を中心として - 縄文土器論集	
白鳥良一	1989	前期大木式土器様式	縄文土器大観1
鈴木克彦	1999	円筒上層式	縄文時代10号
丹羽茂	1989	中期大木式土器様式	縄文土器大観1
東通村教育委員会	2001	東通村史 - 通史編 -	
三宅徹也	1989	円筒下層式土器様式	縄文土器大観1
三宅徹也	1989	円筒上層式土器様式	縄文土器大観1

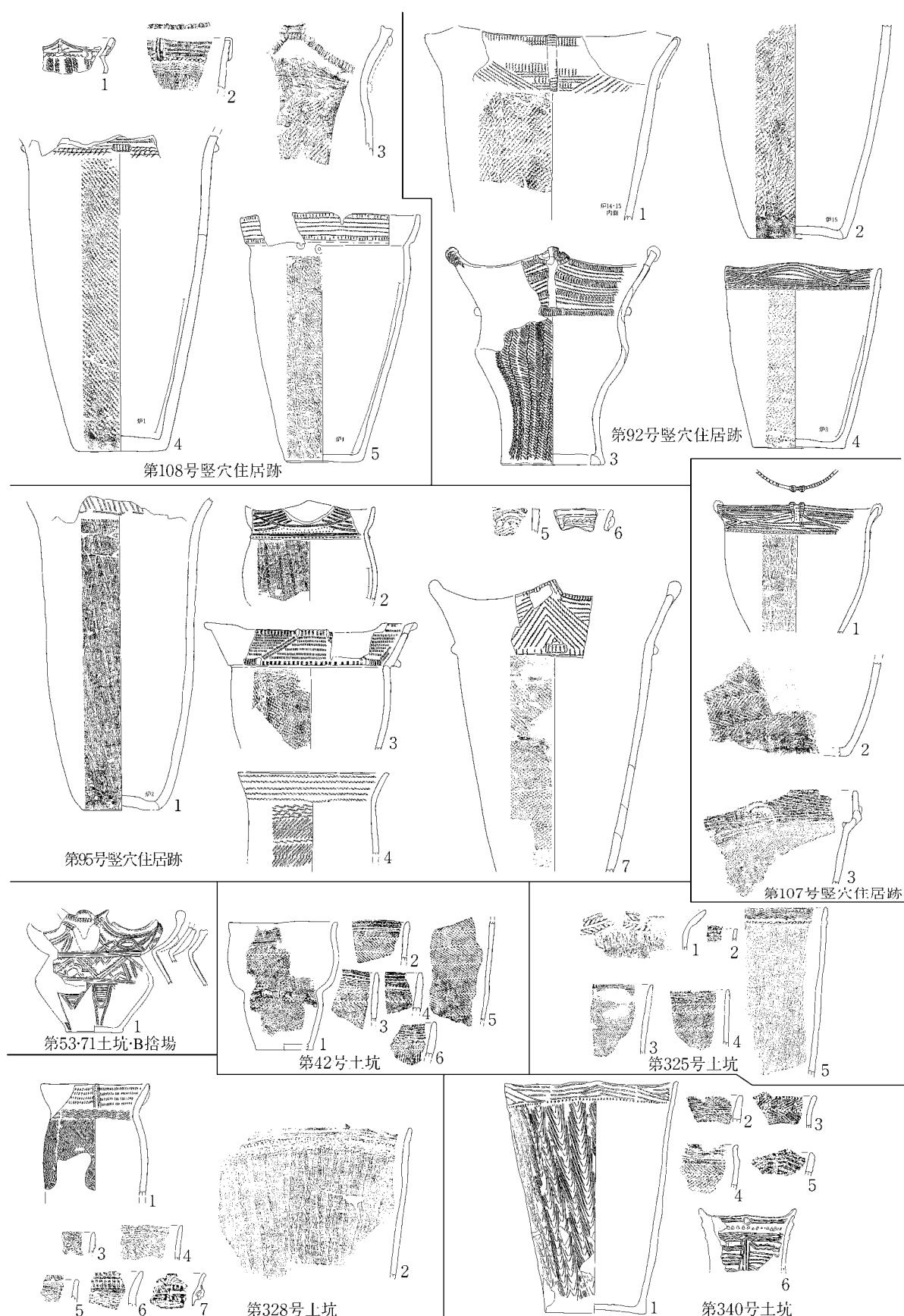


図1 畑内遺跡出土土器

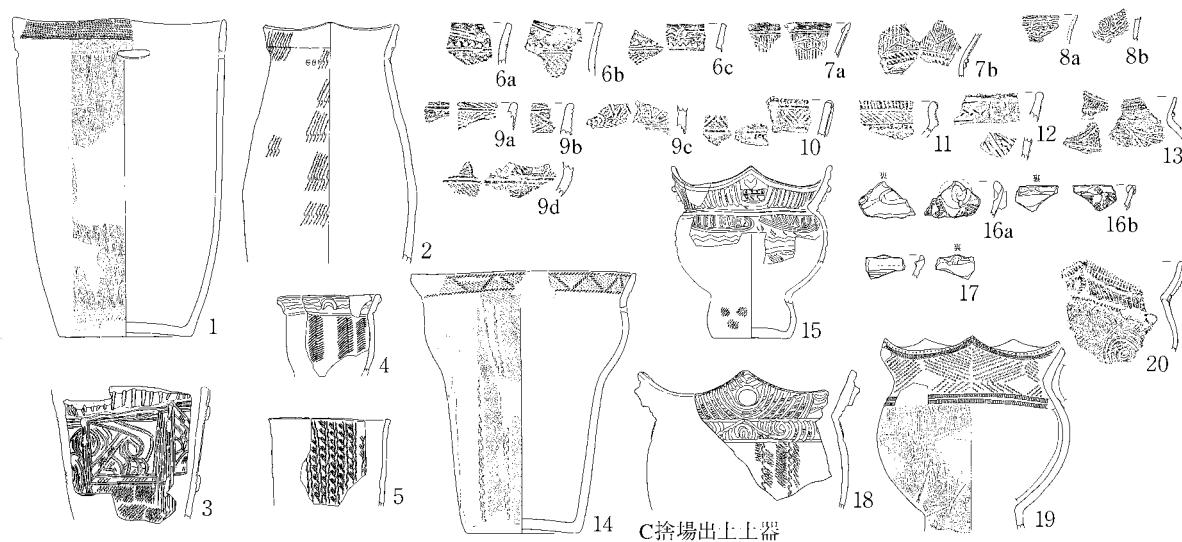
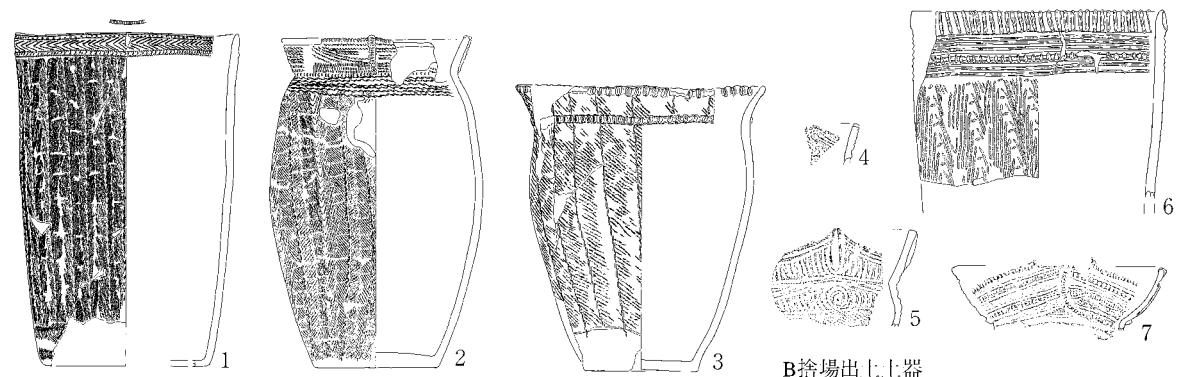
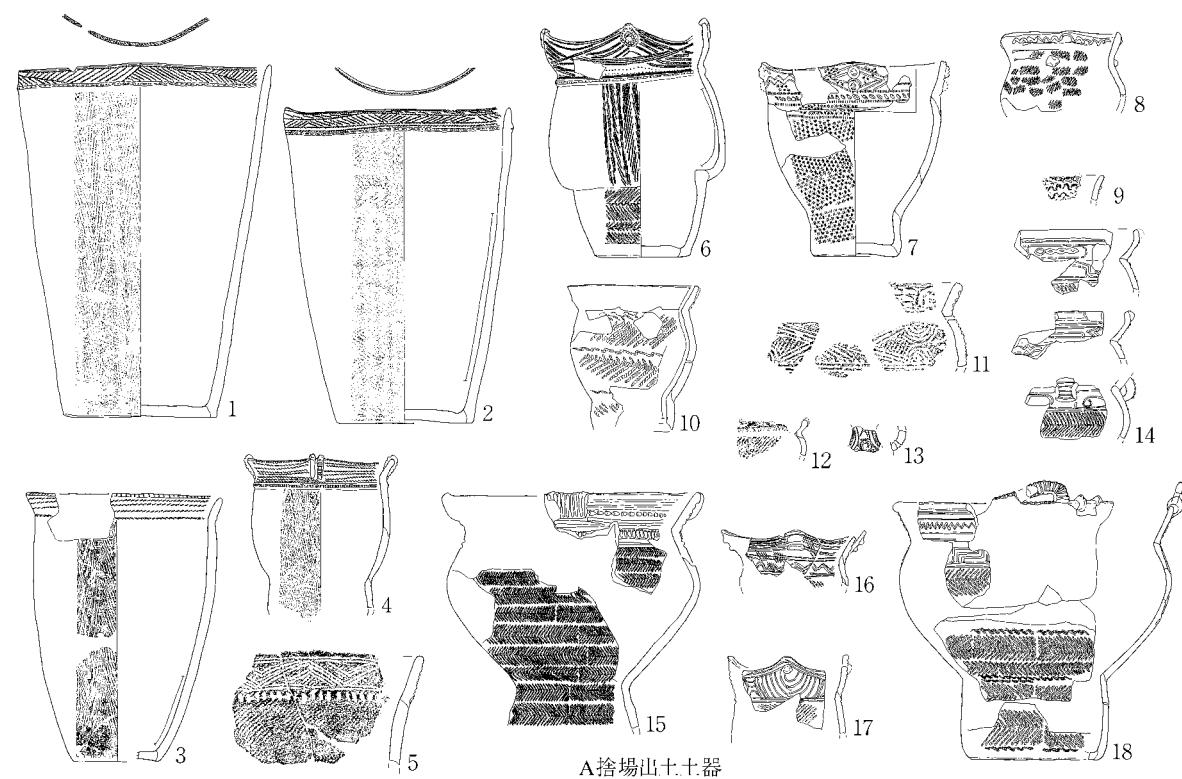


図2 畑内遺跡出土土器

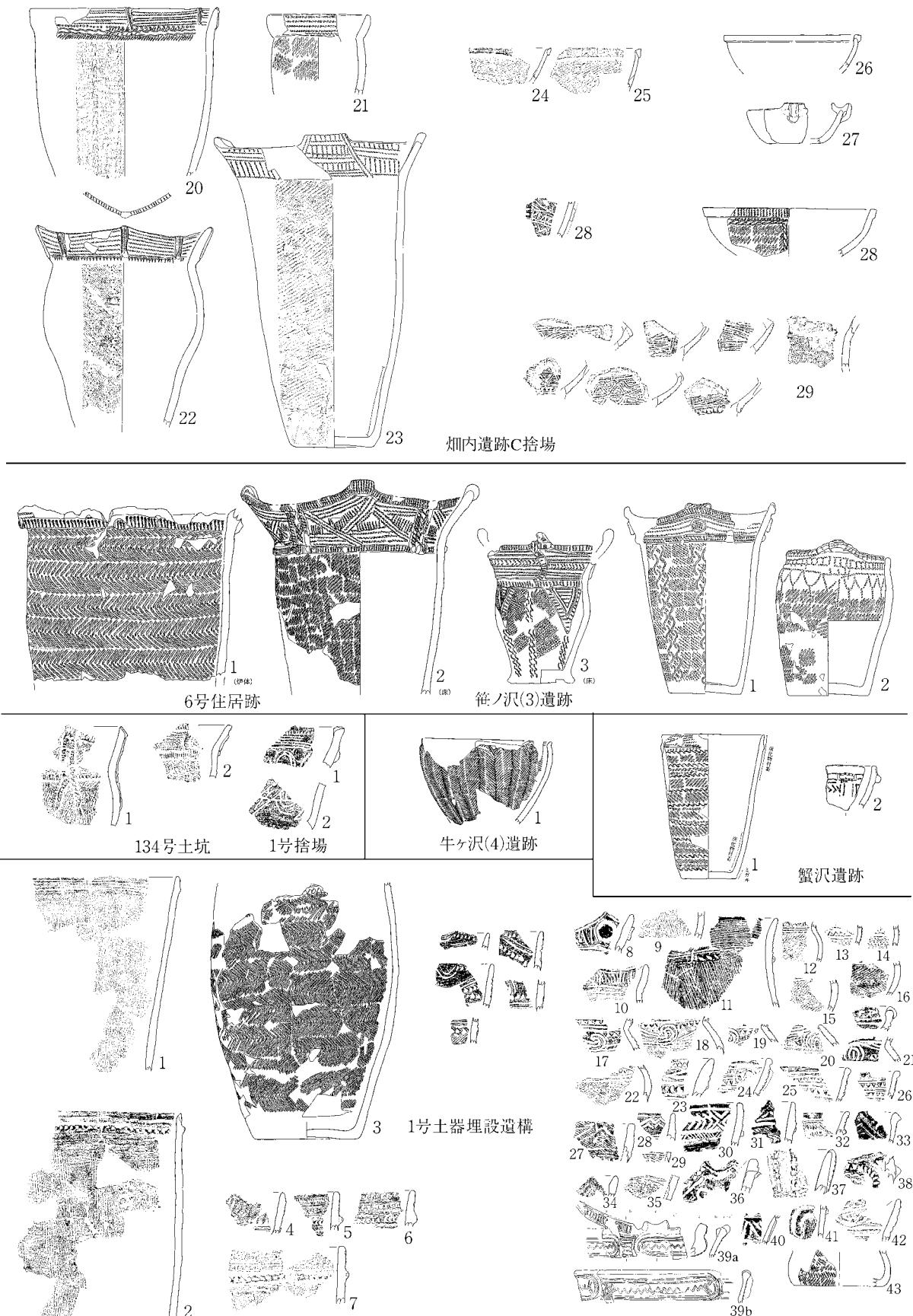


図3 畑内遺跡出土土器・他の遺跡出土土器



図4 その他の遺跡出土土器②

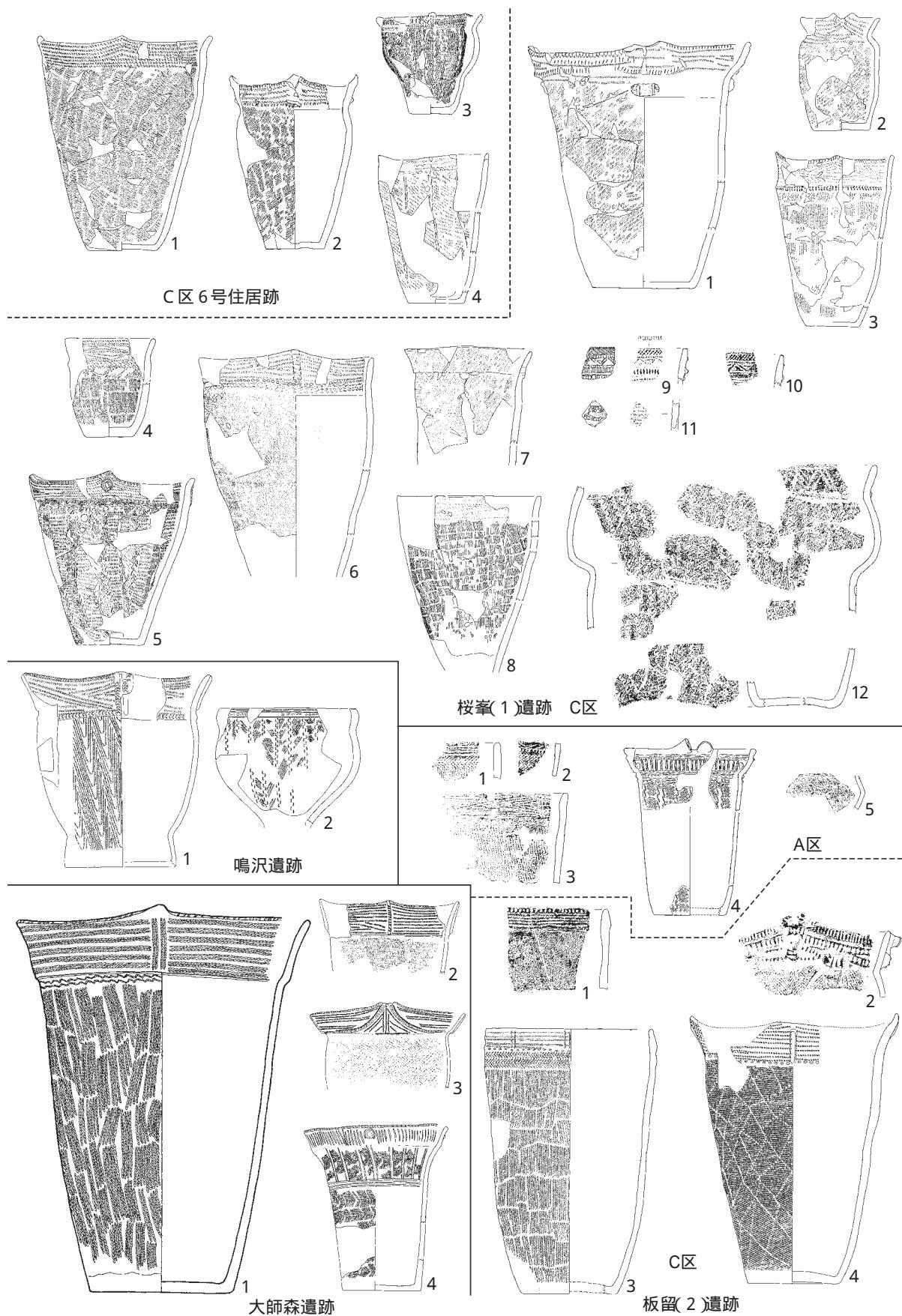


図5 その他の遺跡出土土器

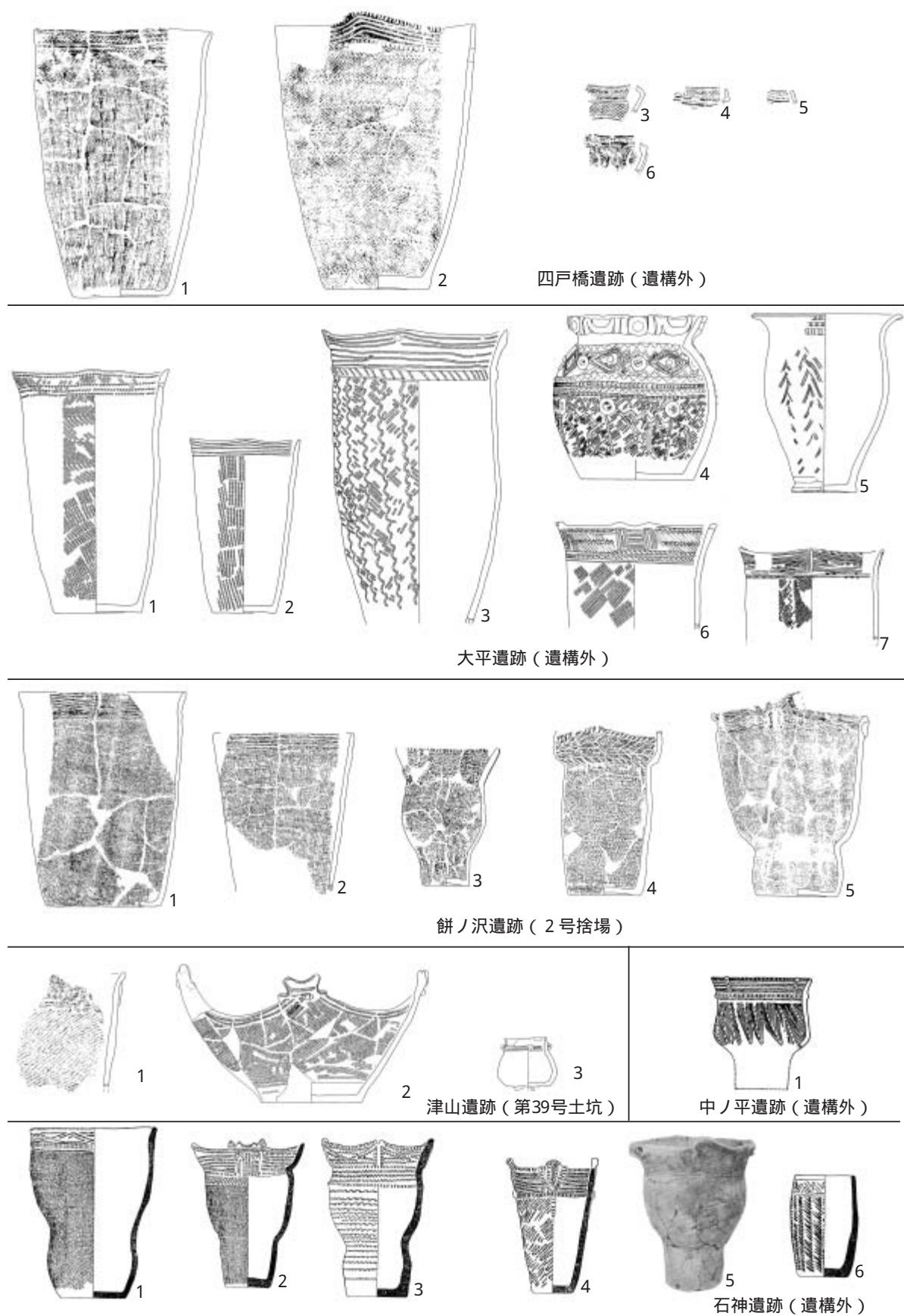


図6 その他の遺跡出土土器

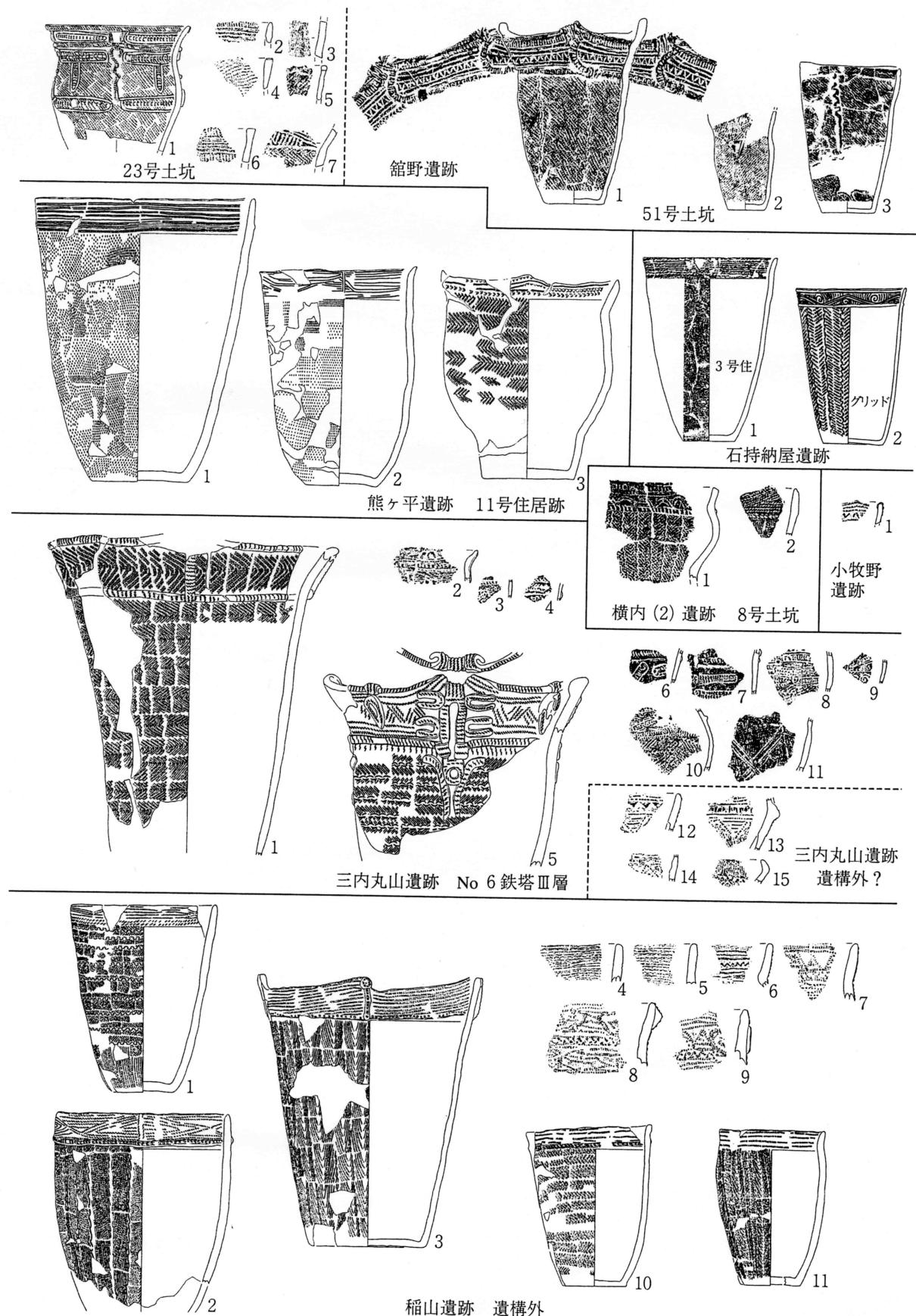


図4 その他の遺跡出土土器②

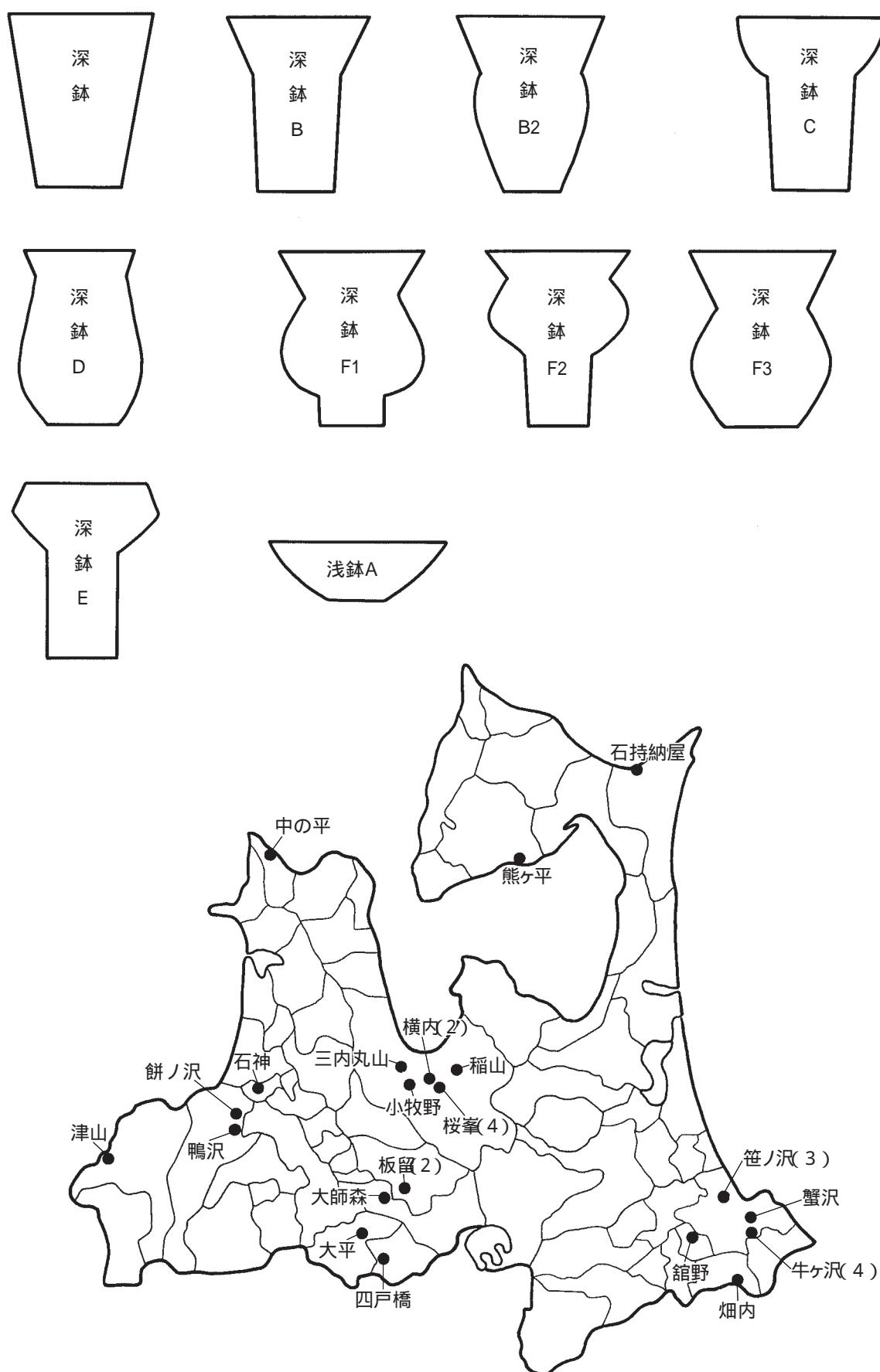


図7 器形分類図及び遺跡位置図